

■ 藤井遼君は東大に合格できるか ■

断っておくが、藤井遼君は本校の生徒ではない。龍海学園^{たつみ}の生徒である。16年ぶりの新シリーズのドラマ『ドラゴン桜』の舞台、龍海学園は経営破綻寸前。そこへ再建を託された元暴走族の弁護士である桜木建二がやってくる。桜木は偏差値が低い生徒たちを東京大学合格に導こうとする。

成績は学年トップだが、上から目線で、他人を見下し、主人公たちをバカにする藤井君は、桜木にこう言われる。「性格が悪い奴は東大に落ちる」。その言葉どおり、成績トップのはずの藤井君は、東大専科のチームとの勝負に2度も敗北することになる。

実は、藤井君にはモデルがいる。現役東大生で原作『ドラゴン桜2』編集担当の西岡壱誠である。彼は2浪が決まった時に、「ああ、自分は謙虚じゃなかったな」と深く反省したという。この経験から、「僕は性格が悪かったから、東大に2回も落ちました」と断言して憚らない。

西岡によれば、藤井君の最大の欠点は謙虚さがいないことである。彼のようなタイプは、自分のミスと向き合わない。模試の結果も他の人からの評価も、自分の都合のいいように解釈してしまう。だからいつまで経っても自分を向上させることができない。自分が謙虚じゃないと認めることは非常に難しいことだが、できないと成長は期待できない。

藤井君は、敗北を認め、「東大専科」に入り、いいやつになっていく。性格が変わった秀才は果たして東大に受かるのか、それとも……。 「そんなこといったって、ドラマの中の話でしょ」、と侮ることなかれ。西岡は脚本監修にあたり、500人を超える東大生を取材している。統計学上のエビデンスを得るには十分だ。

この他にも、西岡はいくつかの法則を発見している。例えば、「東大生は『自責思考』が強い」。東大生は失敗には厳しく、「なぜ、ここでこうできなかったのか」という批判的な目で見ると見る。だが、目を向ける先が、他人ではなく自分で、「もっと自分がこう動くべきだった」と考える。失敗や弱点こそが自分を成長させる最強の道具であると知っているからだ。

また、かなり多くの東大生が「違う分野で挫折したから、そこから東大を目指した」と答えている。劣等感や敗北感をしっかり受け止め、自分は何ができないのか、何をしたらよいのかを常に考えて努力する姿勢が、東大合格につながったとみている。

高い志望を持って大学受験に挑戦すること。そこから得られるものは志望大学の合格だけではないようだ。幅広い教養と高い学力が身につくことに加え、謙虚さ、責任感、挫折から這い上がる逞しさなど、性格まで善くしてくれるのだから、全力で挑まない手はない。